

印刷業界の発展に向け「変革」に挑戦

Japan Color 認証制度による標準化を推進

－ 印刷産業の底上げと印刷の社会的コスト低減へ －

印刷機械の生産額 2 年連続の増加 高付加価値設備に需要

― 日本の印刷市場は縮小傾向が続いていますが、印刷産業機械工業会の現状はどうですか。

宮腰 2011 年度の印刷産業機械の生産額実績は前年比 1.4% 増の 1855 億円でした。印刷産業機械業界はリーマンショックや東日本大震災の影響による部材関係の調達困難などにより、生産の大幅減を余儀なくされていました。しかし、2011 年度はリーマンショック前と比較すると約 43% の水準ではあるものの、前年度に引き続き微増となり、2 年連続の増加となりました。

印刷産業機械の世界市場は依然として厳しい状況が続いています。国内市場や欧米などの先進国市場では、デジタル印刷の進展による技術革新や電子メディアの台頭などに対する行き先不安から設備投資の先送りを受けられ、また、円高による海外市場での競争力低下により受注が減少しました。一方で、国内と新興国の一部において先進企業から高付加価値の需要があり、生産の増加に寄与しました。

輸出入については、2011 年度の印刷産業機械の輸出額実績は前年比 6.0% 減の 1492 億円でした。主要な輸出先を見ると、一部の新興国向けは増加したものの、その他の国では円高による競争力の低下とともに全世界に影響を及ぼしている欧州の債務危機による為替の変動やユーロ安もあり、前年と比べて概ね減少しています。特に、これまで主要な輸出先であった中国をはじめとした東アジア市場や欧州市場向けが低迷しています。その中でも中国は、パッケージ関連機械は堅調な需要に支えられましたが、印刷産業機械全体では経済の減速と金融引き締めによるファイナンスの問題により大きく減少しました。インド、インドネシアなどの一部の新興国向けは増加しています。

一方、2011 年度の輸入額実績は前年比で 4.2% 増の 335 億円となり、2 年連続の増加となりました。しかし、国内市場は元気が無く、印刷産業機械最大の生産国であるドイツからの輸入もほぼ横ばいとなっており、輸入全体で見た場合、リーマンショック以前と比べると半分程度の水準です。詳しいデータは工業会のホームページに掲載されていますのでご覧ください。

― JPMA はどのような事業を行なっているのですか。

宮腰 法人格を一般社団法人に移行し今年が 2 年目になりますが、移行時に主たる事業として掲げた「Japan Color 認証制度事業」を中心に事業を展開していく計画です。

改めて Japan Color 認証制度について説明しますと、従来、出来上がった印刷物の良し悪しは顧客の目によって決められており、明確な基準がない中で印刷物は作成されてきました。印刷物の発注者、デザイナー、カメラマンなどからの色再現の要求に対して、印刷会社は度重なる修正や刷り直しで対応しているのが実状です。このような状況を生じているのは、印刷物作成に関しての標準的な基準がなく、認定する公の機関がないことが大きな要因となっています。そこで、発注者が標準的な基準値で指定した色を、印刷会社で適切に再現できることを一般化し、不要な修正や刷り直しを削減するために、Japan Color 認証制度を創設しました。

Japan Color 認証制度は印刷産業の底上げを図るツール

これは第三者的な立場、言い換えれば印刷会社と需要業界の中立的な立場にある JPMA こそが難しい局面にある国内の印刷産業の底上げを図る一つのツールとして提供していくに相応しい立場にあるものと考えています。

Japan Color 認証制度事業も今年で 4 年目となります。これまでに認証取得された企業・事務所は 6 月 28 日現在で標準印刷認証が 89 件、マッチング認証が 21 件、プルーフ運用認証が 9 件、プルーフ機器認証が 50 件となっています。

現在、Japan Color 認証制度は、プルーフ出力から印刷までを網羅しています。Japan Color 認証制度は「日本の印刷品質全体の底上げ」と「印刷の社会的コスト低減」に大きく貢献すると同時に、認証制度を取得した企業のイメージアップにもつながり、さらには「印刷品質の安定化」「コスト削減」などのメリットや相乗効果が期待できます。

近年、色再現の標準化により印刷工程の工業化を進める動きが出始めています。また同時に、「印刷の多拠点化」「グループ間での基準共有化」「協会社間での品質保証」などの動きに伴い、一拠点に留まらない基準の共通化が必要になりつつある現場では、「自社単独の基準」から「協会社間」、ひいては業界全体を貫く Japan Color のようなボーダーレスな標準が不可欠になってきています。

認証は取得することが目的ではなく、取得後の運用こそが重要であることを、これまで以上に皆様に理解していただき、印刷業界の礎となるよう取り組んでいく考えです。

ビジネスモデルや業態の変化・変革に積極的に対応

— 課題はありますか。また、どういう方向を目指していますか。

宮腰 最近の印刷業界は、メディアの多様化が進んだことにより、印刷物が小ロット化傾向にあります。今後、高付加価値化やオンデマンド対応、バリアブル印刷対応などがより一層求められるようになると考えられます。印刷関連産業は厳しい状況下にあっても方向を見誤らずに前進しながら、このような逆境を乗り越えていかなければなりません。

JPMA では昨年 9 月、Japan Color 認証制度の「マッチング認証」「プルーフ機器認証」「プルーフ運用認証」を立ち上げました。これらの認証事業による標準化への取り組みを行なっていきます。

Japan Color 認証制度については、凸版印刷が全社的に Japan Color マッチング認証取得の方針を発表したように、関心が高まっています。今後は重点地域を定めて啓蒙に力を入れ、さらなる普及に努めていきます。同時に、認証を取得するには設備投資も必要になりますので、経済産業省や日本印刷産業連合会などに対して助成制度の必要性を訴えていきたいと考えています。

調査研究事業では、平成 21 年下期から 2 年半にわたり温室効果ガス排出量を算定する方法の調査研究に取り組んできました。印刷産業機械の CO² 削減のため新機種の開発・普及促進を推進するために、プリプレス機器、オフセット枚葉印刷機、オフセット輪転印刷機、製本機械の 4 機種を対象に温室効果ガス排出量を算定する方法を業界基準として取りまとめ、5 月 24 日の JPMA の理事会で工業会基準値として今後推し進めることが認証されました。

印刷産業機械における温室効果ガスの「算定基準と運用」を調査研究事業で継続調査・検討することにより、日本の印刷物の底上げと印刷に関する社会的コスト低減へ貢献していきたいと考えています。

繰り返しになりますが、JPMA は日本の印刷物の底上げと印刷に関する社会的コスト低減に貢献するため、Japan Color 認証制度と印刷機械における温室効果ガスの算定基準と運用のさらなる推進・普及活動を行い、業界の持続可能性に寄与できるように取り組んでいきたいと考えています。

また、5 月にドイツで開かれた drupa2012 では、主催者の Messe が「来場者の約 40%がデジタル印刷機やデジタル印刷機で統合されたシステムに関心を示した」と報告しており、導入設備の投資対象が今までのオフセット印刷機やその関連機器から、デジタル印刷機とその活用支援ソフトウェアや前後工程の装置へとビジネスの潮目が変わっていく様子が伺われます。このようなビジネスモデルや業態の変化・変革を敏感に感じ取り、今後の印刷関連業界のあるべき方向を見据えて取り組んでいきます。

来年は JGAS2013 が開催されます。drupa2012 で展示、発表された内容が JGAS2013 でより具体的な姿・形となって展示されると確信しています。印刷業界が抱える環境問題をはじめ、様々な問題点を改善するためのソリューション提案、今後さらに広がりをもせるデジタル印刷関連など多岐にわたる展示や企画により、国内外より多くの方に来場していただけるように最善を尽くします。

このほか、会員拡大が課題となっています。ピーク時 180 社あった会員数は現在 103 社までに減っています。とくにデジタル関連企業に呼びかけて加入を勧めていきたいと考えています。

印刷・関連業界の発送を信じて「変革」に挑戦を

-- JPMA は印刷機械業界の中核として、また、印刷産業のパートナーとして期待されています。豊富をお聞かせください。

宮腰 日印機工の会長としての責任の重大さに緊張しています。この業界は衰退産業、構造不況業種と最近よく耳にします。しかし、他の業界で衰退産業、構造不況業種といわれるものも多くありますが、全てが衰退したわけではありません。

drupa の展示でも、この業界の「変革(イノベーション)」を示唆するものが数多くあったように思います。このような時であればこそ、印刷業界のサステナビリティと今後の発展のための変革に取り組む必要があると周りが教えてくれているのではないのでしょうか。実際に、変革に取り組んでいる企業は伸びています。変わることでチャンスが生まれてきます。

昨年は、3月の東日本大震災以降、タイでの広範囲かつ長期間にわたる洪水などの災害だけでなく、長期化する円高基調や欧州の経済情勢不安もわが国経済ならびに産業界に大きな影響を及ぼしました。

このような環境のなかでも現在私達の生活や職場などにおいて、これまで当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観が革命的、劇的に変化しています。結果だけを踏まえれば「あーなるほど」と思うことが多々ありますが、この結果を導き出すまでにはかなりの労力・エネルギーやお金・時間を費やします。

印刷業界では変革という言葉をよく耳にしますが、「変革」とは何でしょうか。昨日までやっていたことを「少しだけ変えてみる」のは変革ではありません。ある意味で、反対のことをやってみる「挑戦」ということになるのでしょうか。しかし、挑戦するにもいろいろな決断が必要であり、一筋縄ではいきません。

いずれにしても「変える」「変わる」ということは大変なエネルギーが必要です。ということは、普段から「変える」「変わる」ということを念頭にいろいろな視点から見聞することが重要だと思います。印刷・関連業界の一人ひとりが業界の発展を信じ、「変革」に挑戦していこうではありませんか。

私自身も JPMA の会長に選任され、これもある意味変革だと感じており、「今までとは全く違った世界が見えてくるのではないか」と不安と期待でいっぱいです。

私自身が変わるためにも、皆様と一緒に取り組んでまいりたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

【宮腰巖 氏プロフィール】（一部省略しています）

座右の銘は「近き者 説(よろこ)べば、遠き者 来たらん」「仲良く働け 笑って暮らせ」

「社員が明るい会社には客は自然と来るもの。CS(顧客満足)よりも ES(従業員満足度)が大切」

趣味は仕事。

(2012年07月号 印刷界 掲載)